

編集後記

編集長(ダン シロウ)

さあ、いよいよ10年目。持続、継続が趣味の私にとって、年4回、きちんと刊行し続けて37冊目が迎えられたことが本当に嬉しい。元気だったこと、発行を続ける気力に陰りのなかったことがベースにはあるし、強力な後継編集者チバアキオ、オオタニタカシの育ちの順調なことも大きい。

しかしなにより、マガジンの趣旨に賛同して連載し続けてくださる執筆陣の貢献が大きい。おそらく9割近くは、私が個人的に繋がりを持ったことがある人達だ。何らかの形で関係のある人々に、執筆を打診して今に至っている。

私見だが、「援助・支援」と称する分野に、このファクターはとても大きい。専門性というのは存在するが、そのことと長期継続は結びつかない。年4回の締切りを、律儀に果たして下さるのは、私との繋がりゆえの要素が少なからずある。だから定期刊行が実現できているのだと思う。

あらゆることに結果は出る。時間のかかるモノもあるが、それと中味の適切性と関係がない。むしろ早く成果をと思えば、雇われCEOの迎える決算期のように、半年、一年と短期に成果を欲しがってしまう。

他者との持続的繋がりを旨とする対人援助学。そう位置づけると、地域コミュニティとか、専門業務としての継続性とか、援助職者自身の人柄などが、皆含まれてくる。

人柄は良くないキレキレの敏腕外科医みたいな人はこの分野では不要だ。専門家を道具のように使いたい患者もあるが、専門家からは部品のような病人として扱われるだろうから、そこはお互い様だ。

「対人援助学」というカテゴリーは、こういう人間的営みの中に、専門職として位置付くことを模索している。その一助として「対人援助学マガジン」が果たしている役割があると信じて、10年目のスタートである。

編集員(チバ アキオ)

人間の体は食べたものでできている。今の自分の体は、数カ月前に食べた食物からできていると聞く。食べた物を分解、吸収し、再生成する。体の細胞、筋肉、神経繊維、血等である。それは食した物が原材料になっている。原料の質が良ければ、質の良い肉体ができるだろうし、またその逆もしかり。父が日本の平均寿命に届かず、他界したことは自分自身の食生活を考えさせられる。結果、歩くことも増えた。「あきおさん、すごいね！」とほめてくれるスマホのアプリに励まされている。

物事の考え方も、情報も同じだろう。何を入れて、自分を形成していくか。自分の中に入ったもので自分自身は構成されていく。利用者のための支援を実践する人間にとって、またこうして発信の場がある人間にとって、インプットは欠かせない。そして、当然インプットの質も重要である。

そのインプットのの一つが、このマガジン。継続してインプットしていて、もう10年目に突入。周辺では、よいことの方が多く起きている。単純な因果関係では説明できないが、それを含んだ生活であることを良しと考える。よいことは継続していく。そんなこんなで、もう37号である。

編集員(オオタニ タカシ)

編集後記を書く時期になる度に、対人援助学マガジンにおける「編集」とは何なのだろうか？という問いが、ふと頭をよぎります。編集、という仕事は、まだまだ私にとっては不思議で、未知で、魅力的なものです。編集と言っても原稿に直接的に変更を加えるようなことはほとんど皆無ですし、ご自分で完成原稿を送ってくださる執筆者も多くいます。だから、編集員と言っても、それほど大げさな役割を負っているわけではないのです(もちろん、多くの原稿が締切日にきっちりそろるのは、編集長のおかげなのですが…！)。

それで、ふとこんなことを考えました。もし、執筆者がそれぞれに完成原稿を作成して、それを Web 上に並べ直して設置したとしたら…？結果としてできあがるもの自体は、今とまったく同じになるはずである。

しかしそれは、はたして対人援助学マガジンと呼べるのだろうか…？そう考えると、人を介して何か成されていくことの意味が、ここにはある気がします。人が住み

続ける家は生き、住まない家がたちまち朽ちるように。駅員のいる駅舎に、無人駅にはない気配が感じられるように。そこにだれかがいるということが重要なことがある。

日々の仕事の中でも、企画した研修に研修スタッフとしてただその場にいる、という時間があります。そんな時間の心地よさや意義を改めて感じる事ができました。労働人口の減少や効率化という観点から、ますます機械化、自動化がますます進み続ける現在。本当にそれが豊かさにつながるのだろうか？そんなことも考えつつ、マガジンの編集に携わるめぐり合わせがあったのは、やはり自分の人生にとって幸いなことだったのだろうと改めて感じ入るのでした。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4-3-8
ランプラス二条御幸町4-0-2 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻37号

第10巻 第一号
2019年6月15日発行
<http://humanservices.jp/>

第38号は2019年09月15日
発刊の予定です。
原稿締切2019年08月25日！

執筆要項

いよいよ10年目を迎えた対人援助学マガジン。新たな書き手を求めています。新たなジャンルからの登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の関心分野、専門分野の今の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決まっているわけではありませぬ。必要な回数(ずっと・・・というのもあります。)を、書いていただけるよう設定します。関心のある方、ご希望の方は編集長まで執筆企画を打診して下さい。

執筆資格は学会員(執筆することになってからの入会でも可能です)であることです。

対人援助学会事務局

表紙の言葉

2011年9月から開始した東日本家族応援プロジェクト10年継続事業の9年目。毎年開催してきた「木陰の物語」漫画展のパネル制作も最終コーナーにさしかかっている。

今回の表紙は2019年用制作の中、最後の一作で試行錯誤の末、決定した「循環バス」の最初の場面だ。

ここ一年、漫画を描いたり編集加工したりする時間が飛躍的に増えた。新作を描くペースは従来と変わらないが、232話に及ぶ作品の中から、パネルや掛け軸にして観てもらえる機会も増えたのだ。

漫画家になりたいと思っていたわけではないし、そんな努力もしていないので、苦勞はしていないが、近年、漫画を触っていると楽しいと思うようになってきている。

カラー版制作で、座席シートの色はどうか、窓外の時刻は何時頃の夕焼けにしようかなどと、考えていると楽しい。その割に上手く描けなかったりして、やり直しを何度もする。フォトショップでデータ加工だと、何度でも修正可能なのでストレスにならない。いい時代に間に合った。(Dan)

(2019/06/15)